コレンテ　vol. 46　n.419　　ottobre 2025

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク㊿

＊引き裂かれた世界と人間と＊

堤 康徳

私が最初に読んだカルヴィーノの作品は、河島英昭訳『まっぷたつの子爵』(晶文社、1971 年)だったと思う。恩師の河島先生が訳されたこの中篇小説を大学の図書館で借り、一気に読了した記憶がある。18 世紀のリグーリアらしき地方を主な舞台にした『まっぷたつの子爵』(*Il visconte dimezzato*)は、1952 年、エイナウディの「ジェットーニ叢書」の一巻として刊行された。『木のぼり男爵』(*Il barone rampante*, 1957)、『不在の騎士』(*Il cavaliere inesistente*, 1959)とともに、歴史空想小説三部作『われわれの祖先』(*I nostri antenati*, 1960)を形成する。

> むかしトルコ人との戦争があった。ぼくの叔父、テッラルバのメダルド子爵は、キリスト教徒の陣営をめざして、ひたすらボヘミアの平原に馬を進めていた(『まっぷたつの子爵』河島英昭訳、晶文社、2006 年、p. 7)。

『まっぷたつの子爵』はこのように語り出される。一人称の語り手は、主人公のメダルド子爵の甥である。トルコ軍の砲弾を浴びて体を二分された子爵は、右半分が悪玉、左半分が善玉となって生きながらえる。まずは右半身が故郷のテッラルバに帰還する。森を通れば、蛙やキノコを半分に切断してゆく彼の残忍性があらわになる。そして、年貢の足りない農民は処刑し、ハンセン病感染者の集落には火を放つなどの非道な悪政を行う。そんななか、左半身が帰郷して、両者は相対することになるのだが……

善と悪に分断された人格、善人と悪人の対立というテーマは、文学の世界においてけっして目新しいものではない。カルヴィーノ自身が『我々の祖先』の「あとがき」で認めているように(Italo Calvino, *Nota 1960*, a *I nostri antenati*, Milano, Garzanti, 1989, p. 401)、彼が愛読するスティーヴンソンの『ジキル博士とハイド氏』や『バラントレーの若殿』で、その主題はすでに追求されている。しかし、カルヴィーノの関心は、善悪の対比そのものにはなく、それを利用することによって、「疎外」され、「抑圧」されて調和を失った人

間の、引き裂かれたイメージを表現することにあった。したがって、善いほうの半分は、悪いほうの半分と同じく、不完全な存在にすぎなかった。自作について、カルヴィーノはのちに、「あまりにも杓子定規に善良で、善意に満ちた人物は、手におえない困り者だ」(Italo Calvino, *Presentazione*, a *Il visconte dimezzato*, Milano, Oscar Mondadori, 2010, p. VI)とも語っているが、実際に、メダルド子爵の善玉は、けっして愛すべき人物として描かれていない。善意を押しつける善玉は、やがて周囲からけむたがられるようになる。

> こうしてテッラルバの毎日はすぎ、ぼくたちの感情はしだいに色褪せて、鈍くなっていった。そして非人間的な悪徳と、同じくらいに非人間的な美徳とのあいだで、自分たちが引き裂かれてしまったことを、ぼくたちは思い知っていた(『まっぷたつの子爵』前掲書、p. 158)。

『まっぷたつの子爵』は、当然ながら、作者の生きた時代を反映している。イタリアは第二次大戦末期、連合軍が解放した南部と、ドイツ軍の支援を受けた新ファシスト政府の支配する北部が分断されていた。北イタリアが、カルヴィーノ自身もパルチザンとして参加したレジスタンスによって、ナチファシストから解放されたのは、1945 年 4 月下旬である。翌年 6 月の国民投票を経て、イタリアは共和国として生まれ変わった。しかし戦後数年のうちに、世界は冷戦の暗い影に再び覆われ、東と西の陣営に引き裂かれてゆく。この小説が執筆されたのは、そのような時代だった。

小説は、墺土戦争の凄惨な戦場から始まる。その黙示録的な光景は、上空を飛ぶ鳥と騎馬をとおして象徴的に描かれる。戦場につきものの、カラスやハゲタカは、ペスト菌に感染してとっくに姿を消し、その代わりに、コウノトリが死体の肉を狙って上空を旋回している。子供を運んでくると伝えられるコウノトリは幸福の鳥どころか、破局の予兆なのである。1949 年の短篇集『カラスが最後に来る』の表題作では、カラスは死の象徴だった。カラスは最後に、パルチザンの少年が射殺するドイツ兵の死体のうえに、まるで兵士を弔うように舞い降りてくる。民話の世界さながらに、動植物が多く登場する初期のカルヴィーノ文学のなかで、鳥はつねに最も象徴性の高い生き物として出現する。

トルコ人の半月刀で腹を割かれたキリスト教軍の馬の描写からは、キリスト教世界とイスラム世界の対立の歴史とその傷跡を読み取ることも可能だろう。ここで思い出されるのは、ダンテの『神曲』地獄篇第 28 歌である。生前に混乱と分裂の種をまいた者たちが断罪されているこの歌章では、宗教界を分裂させたとされるマホメットが身体を縦に裂かれ、はらわたをあらわにしているのである。

メダルド子爵の周辺人物たちは、その多くが、明暗の対比のなかに配されている。たとえば、メダルドの父、アイオルフォ子爵は、鳥を飼うことだけが生きがいの老人で、かわいがっていたモズを息子に惨殺されて悲嘆のあまり死んでしまうのにたいし、テッラルバ家のすべての若者たちに乳を与えた乳母のセバスティアーナは、悪事をはたらくたびにメダルドを非難し続ける強い女性として描かれる。

私が本書を読み返してとりわけ興味深く思われたのは、トレロニー医師(名前は、スティーヴンソンの『宝島』の登場人物にちなむ)と、腕のいい大工、ピエトロキョードだった。キャプテン・クックの元船医で、難破してテッラルバに流れ着いたトレロニーの関心は、人間の病ではなく、コオロギの病気や人魂の研究に向けられている。ピエトロキョードは、メダルドの命令にさからえずに、拷問装置や絞首台などの精巧な機械を作り上げる。カルヴィーノによれば、後者は、原爆その他の装置を、何に使われるか考えもせずに構築する今日の科学者や技術者、前者は、人類との連帯を絶った「純粋な」科学者を表しているという(Italo Calvino, *Nota 1960*, cit., p. 402)。

物語はしかし、幸福な結末を迎える。羊飼いの娘パメーラとの結婚をめぐる決闘で負傷したメダルドの右半分と左半分はトレロニーによって縫い合わせされ、良くも悪くもない完全な人間に戻るのである。

> しかも彼にはひとつになる以前の半分ずつの経験があったから、いまではじゅうぶんに思

慮ぶかくなっていた。彼は子宝にめぐまれ、正しい政治をおこない、幸せな一生を送った。ぼくたちの生活もよくなった。子爵さえ完全にかえれば、すばらしく幸福な時代がひらかれるものと、僕たちは決めてかかっていたかもしれない。しかし、当然のことながら、世界じゅうの人々が完全になるためには、ひとりの完全な子爵でたりるはずはなかった(『まっぷたつの子爵』前掲書、pp. 176-177)。

本連載第 7 回に書いたように、カルヴィーノが編纂した『イタリア民話集』に、「まっぷたつの男の子」(*Il dimezzato*)と題されたヴェネツィアの民話があるが、『まっぷたつの子爵』はこの民話に着想を得ていると思われる。もっとも共通のモチーフは、文字通り半身の若者を主人公とした点だけであり、物語の内容はまったく異なるのだが。

民話「まっぷたつの男の子」はこんな話である。ある妊婦が魔女の畑のパセリを全部たいらげてしまう。魔女は妊婦を見逃すかわりに、生まれた子が 7 歳になったら半分は自分がもらうと告げる。そして 7 歳になった男の子は魔女の予言どおり、包丁で体をまっぷたつに引き裂かれる。母親のもとに戻った半身の男の子は漁師となる。ある日、彼が命を救った大鰻から、「何でも望みをかなえてあげる」と言われる。彼は大鰻の魔法の力を借りながら、最後は王の娘と結ばれ、完全な体を取り戻すのである。一方、魔女がもらい受けた片割れがどうなったかは一切語られていない。

「まっぷたつの男の子」という民話の根底には、旧約聖書に書かれた「ソロモンの審判」(列王記上 3:16-17)があるのではないかと思われる。

ふたりの遊女がソロモンのところにやって来る。彼女たちは相前後してそれぞれが男の子を出産するが、一方の女は自らの不注意で子供を死なせてしまう。ふたりの母親のあいだで、生きているひとりの男児をめぐり争いが起こる。ソロモンはふたりの女に「剣をもってくるように」命じ、「生きている子を二つに裂き、一人に半分を、もう一人に他の半分を与えよ」と命じる。実の母親がこの子を哀れに思い、「この子を生かしたままこの人にあげてください」と言ったのにたいし、もう一方の女は「裂いて分けてください」と言う。ソロモンはこれに答えて「この子を生かしたまま、さきの女に与えよ。この子を殺してはならない。その女がこの子の母親である」と宣言する。

もし、ソロモンが子供を半分に裂いたとしたら？ そしてもし、体を半分に裂かれた子供が、それぞれ生き延びることができたとしたら？ そのような突飛な発想から「まっぷたつの男の子」という民話は生まれたのではないだろうか。民話よりも古くから文化の基層を形成する神話、あるいは旧約聖書などの神聖なテクストで語られたできごとを、ときに自由に変更し、まったく別の奇想天外な結末を用意すること。聖典の記述に反し、想像してはいけないことを想像してしまうこと。それもまた、民話の特質のひとつに数えられるのではないか。

日本イタリア会館が編集・発行する会報誌『コレンテ』に本連載を始めて、15 年が過ぎた。2009 年 9 月、会館の理事長を務める京大の天野恵先生からコラムを依頼された。ちょうど私が、京大で一週間の集中講義を担当していたときだった。卒論のテーマだったにもかかわらず、大学卒業以降ほったらかしだったカルヴィーノについて何か書いてみようと思い、天野先生のご依頼を受けることにした。こうして 2009 年 11 月号に第1回が掲載された。しかしながら、これほど長く続くとは思ってもみなかった。それはひとえに、天野先生、編集を担当された谷口和久さん、『コレンテ』誌読者の皆様のおかげである。

本連載では、カルヴィーノの多彩な作品群をすべて網羅していない。また、とりあげた作品も執筆年代順ではない。福島の原発事故やヒアリの増殖など、この 15 年間に起きたできごとや私の個人的な体験とカルヴィーノの作品をリンクさせた文章が目立つかもしれない。その点はご容赦願うしかない。

正道をはずれ、寄り道することもたびたびあったカルヴィーノへの旅をしめくくるときが来た。50 回という区切りのいい数字で、連載を終えようと思う。暖かく見守ってくださった皆様に心よりお礼申し上げる。

(イタリア語講師)

＊アルコールとスポーツの関係値（もとい可能性）＊

山田 晃裕

41 歳九州男児のアルコール遍歴

福岡（の南の方の片田舎）で生まれ育った私。詳しくは語らないが、アルコールとの出会いは比較的早かったと思う。ふとしたことから語学の道を選び、大学生になって一人暮らしをしてからは、いい仲間と出会い、お酒といいお付き合いをしながら「大人の階段」を登っていったはずだ。

20 歳で迎えた 2004 年、初めての海外でスペイン・アリカンテに留学する。飲み屋通いが大好きな親戚が「スペインに留学っちゃーお前、フィリピンにでも行くとか？」とトンチンカンな言葉を吐くほどに、海外には縁が遠かった地域で生まれ育った若輩者が海を渡り、簡単には帰ってこられないところへ行く。押し寄せる不安が希望の輝きをほんのちょっと上回っていて、今思い出しても「大冒険」だったと思う。

当時の私は、ビールのおいしさに気づき始めたころ。スペインの cerveza は口当たりも軽やかで飲みやすかった。お酒は夜飲むものと思って育ってきたわけだが、昼からスイスイ飲める喜びを知ったのが運の尽き。飲めばすぐ顔が赤くなる（黄色人種の宿命）って分かっているくせに、語学学校の授業終わりに仲間たちとビールを引っ掛けることもしばしば。ランチタイムの 15:00 に合わせて帰宅すると、ホストマザーが “Tienes buena pinta”（今日もいい顔色ね）とにこやかに迎えてくれていたのはいい思い出だ。

バルに入ればコーラやファンタよりも安いんだから当然飲む量も増える。親友と飲み歩く際の “Dos cañas y patatas bravas”（ビール 2 杯とスパイシー・ポテト）は、素敵な思い出を彩るもはや「魔法の呪文」でしかなかった。

時は流れて、2011 年 3 月。ほとんどスペイン一辺倒だった私は現職との出会いをきっかけに、初めてイタリア・ミラノに渡る。折しも東日本大震災が発生した直後で日本国内は大パニック。私自身も「いつ帰れるか分からない」「これからどうなる？」「遠くにいると何もできない」と気持ちが沈んでしまい、ほとんどお酒を飲む気持ちになれなかった。とはいえ、通常運転のイタリア社会に身を投じてやり過ごしていく中で、ずっと気にかかることがひとつあった。

「あのオレンジ色の飲み物はなんだろう？」

明くる 2012 年 4 月に行った初めてのイタリア遠征でその答えを知る。その後はミラノとトレンティーノを中心に、年 2 回ペースで合計 26 回渡伊してきたわけだが、その都度撮影したスプリッツの写真はもうすぐ 200 枚に届きそうなところまできた。APERITIVO（敢えての MAIUSCOLA）を愛する人と肩を並べて笑い合う時間は、誰がなんと言おうと「必要不可欠」である。

スポーツシーンにおける違い

さて、改めて「スポーツとアルコールの関係」に目を向けてみよう。これまでの歴史をもとに語るならば、欧州サッカー界におけるアルコール産業の貢献度はかなり高いものだったと言える。例えば、今や競技レベルでは世界最高峰とも言える UEFA チャンピオンズリーグは、長きに渡りオランダのビールブランド「ハイネケン」社がスポンサ

ーを務めている（※現行契約は 2027 年まで）。また、イングランド・プレミアリーグではカールスバーグ（デンマーク）、ドイツ・ブンデスリーガでは自国ビールブランドであるクロンバッハがオフィシャルパートナーを長きにわたって務めてきた。

日本でもビールをメインとした飲料メーカー各社とスポーツは緊密な関係を構築している。キリン HD はサッカー日本代表を全面的にバックアップ。お正月の風物詩である箱根駅伝はサッポロビールが冠スポンサーを務め、野球界におけるワールドカップである WBC 日本代表はアサヒビールがオフィシャルサプライヤーを務めている。

ここまで見ていくと、国や地域を問わず、あらゆるスポーツシーンにアルコール飲料はうまく溶け込んでいるように思える。野球でもサッカーでも、観客席にはビールを片手にスポーツを楽しむ人はたくさんいるし、プロ野球優勝チームのビールかけ生中継は私が子どもだった頃から「当たり前」だった。

しかし、「お酒は 20 歳になってから」という倫理上の暗黙のルールを前にした時、両者の良好な関係にちょっとしたクエスチョンマークが生じる。日本の J リーグでは、かつて「アルコール飲料の商品名が子どもたちの目に触れるのは良くない」という見解が出て、「試合用ユニフォームの胸スポンサーにアルコールブランドが入るのは好ましくない」という方針を打ち出したことにより、一部クラブがユニフォームの背中や練習着のスポンサーへの変更を余儀なくされたというケースもあった。ほかの競技含めスポーツ界においては、タバコ・ギャンブル系遊技に携わる企業には大きな金銭が動かせる企業も多い割に、この「倫理観の壁」にぶつかることは多いようである。

近年は、かつての全面的な広告展開から【Responsible Drinking（責任ある飲酒）】という新たなキャンペーン方針にシフト。ノンアル商品の露出など「節度のある（抜け道となる）スポンサーシップ」が主流となりつつある。

アルコール産業に変わるものとして、IT サービスや金融商品がスポンサーとなるケースも増えており、時代の流れを感じるところである（欧州では、怪しげな仮想通貨サービスに振り回されるクラブも増えてきたと聞くが）。

<u>イタリアでは Bollicine が台頭</u>

イタリア国内のスポーツシーンにおいて、前述のようにリーグ構造そのもののスポンサーを務めた実績はないが、これまでにもクラブのスポンサーを務める事例は複数存在する。

他国と比較しても「イタリアらしい」と言えるのは、ワイナリーによるパートナーシップだろうか。AC ミランはフランチャコルタの老舗・La Montina 社と提携した実績があり、2022 年のリーグ優勝時にはタイトル獲得を祝う限定ボトルもリリースされた。

ライバルクラブであるインテルは、トレヴィーゾの Santa Margherita 社、ユヴェントスはトレントの Ferrari 社、フィオレンティーナはシエナの Vallepicciola 社とそれぞれパートナーシップを締結している。

ユヴェントスはスタンドではなくスタジアム併設のラウンジで楽しめるようになっている。スタジアムにおけるアルコール摂取は、「ウェルビーイング」を追求する手段にシフトしつつある中で、スポーツ観戦でありながらちょっとしたラグジュアリー空間の演出に一役買っていると言えるだろう。

また、クラブ名に企業名が入ることが許可されているバレーボール界においては、“Imoco Volley Conegliano”が好例。先日世界選手権で優勝したイタリア女子代表のモニカ・デ・ジェンナーロを擁するセリエ A クラブの正式名称は、“PROSECCO DOC Imoco Volley Conegliano”である。

F1 でもレースを終えた後のシャンパンファイトに必ず Ferrari Trento のボトルが露出する（2025 年まで公式パートナー）のを見ても、イタリア各地の Bollicine がスポーツシーンに放つ影響力を思い知らされる次第だ。

<u>ローカルスポーツシーンではどうか？</u>

少なくとも私がこの 15 年間で経験した範囲でのエピソードを語るのであれば、イタリアのスポーツ施設には必ずバールがあるし、アルコールを置いてないバールには今のところ出会っていない。それなりにコンプライアンス遵守のスタンスが主流になりつつあるのは事実だが、スポーツ文化として切っても切れない関係にあるのは明白だろう。

また、スポーツ文化が教育と紐づいて成熟してきた日本だと、アルコール有りのコミュニケーションは「事後のお楽しみ」になりがち。しかし、イタリアでは育成年代のスポーツ現場にアルコール摂取の機会があることはまだそれほどタブー視されていない。

今春のロヴェレートでの国際大会で忘れられない経験をした。指導者をやっていれば、子どもたちと同じく「目の前の試合に勝ちたい」と思って、語気が熱を帯びるのはごく自然なこと。しかし、イタリアの小学生年代の試合では審判を置くことがない「セルフジャッジ」形式で行われることがほとんどのため、ゲーム運営をスムーズにするために、両チームの指導者同士が言葉を交わすことがよくある。試合結果についても大会運営スタッフがスコアをカウントしており、両チーム責任者のサインを持って正式に決定するという流れだ。

もちろんなりふり構わずエゴをぶつけ合って小競り合い(しかもなかなか見苦しいヤツ)を起こす指導者もいるのだが、私自身はこの試合中の大人同士のコミュニケーションが好きで、邪魔にならない範囲で試合中も積極的に会話を交わすようにしている。今春の大会では、対戦した地元クラブの指導者(マヌエルさん)と絶妙にシンクロすることに成功した。

出場したカテゴリーより 1 学年下のチームを率いる中での彼の声がけがとても良かった。技術的に劣る部分や精神的に幼い部分を許容した上で、選手一人ひとりと対話しながら背中を押すコーチング。私も対戦相手でありながら、価値のある“Dai, Non Mollare(諦めるな)!!” だなぁと心を動かされてしまう。こうなると試合中にも関わらず思ってしまうわけです、「ああ、コイツめっちゃいいヤツやん」と。笑

試合自体は我々が 3-2 で勝利し書面にサインをする。握手を交わした後マヌエルさんが“Mister, beviamo una birretta(ビール一杯どう)??”と声をかけてくれるではないか！間髪を入れず食い気味に“Certo, come no(もちろん)!!”と答えた。手短に子どもたちを待機場所へと導き、スタジアム併設のバールへー直線。サイン完了から 3 分で乾杯を交わすことに成功する。

彼自身は私が敵味方問わずいいプレーを褒める姿勢に感銘を受けたので声をかけたとのこと(ありがたいお言葉である)。次の試合が始まるまでのおよそ 1 時間で、サッカーのビジョンから文化・歴史のことまでいろんな話をした。もちろん 1 杯だけじゃ終わるわけがない。

「休息も大事」と言ったにもかかわらず、暇を持て余し私を冷やかしにきた教え子たちに、この素晴らしいアペ時間を邪魔されたくなくて、ポテトを口に突っ込んで遠ざけることを繰り返す。結局ポテトを 2 本しか口に運ばなかったが、私の心は大きく満たされていたのでよしとする。

待機場所となるスタンドに戻ると、両チームの子どもたちが勝手に遊んでいる。いい感じに仕上がった指導者 2 人を見て何かを察したのか、「お互いのチームを応援しようじゃないか」という流れに。心強いサポーターの後押しを得て 1 日を締めくくることができたのは、本当にいい経験だった。

世間の風潮やコンプライアンスを完全無視するわけにもいかない世の中だが、敢えてシンプルな言葉で伝えて本稿を締めるとする。

「アペリティーヴォは世界を繋ぐんだぞ！！！」

【マヌエルさんと】

(AC ミランアカデミー愛知)

編集・発行 /(公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL:(075)761-4356/FAX:(075)761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/